

# 「土佐日記」

更新履歴※[同じリンク](#)で更新していきます。

3/1 現代語訳以外公開

3/10 写真追加

△作者▽

紀貫之

△成立▽

平安時代前期（934・935年頃か）

△特徴▽

- 異性である筆者が女性に仮託
- 仮名文字で表現
- 我が国最初の日記文学を確立

冒頭

サ変・終

男も **す** なる日記といふものを、女もしてみ

サ変・体

むとて、 **する** なり。

終止形

**す** + なり ↓ 伝聞・推量の助動詞

連体形

**する** + なり ↓ 断定の助動詞

帰京

カ変・已△順確▽

夜ふけて **来れば**、所々も **見え** ず。京に入り

ヤ行下二・未

立ちてうれし。家に至りて、門にかど入るに、月

ク活用・已

明かければ、いとよくありさま見ゆ。聞き過去・体し

格助＜比較＞

よりもまして、いふかひなく係助ぞこぼれ破れたる。

存続・用完了・体

家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。

存続・体断定・用詠嘆・終

係助ラ変・已逆説用法

中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて

比況・已＜順確＞

ラ行四段・命完了・体断定・終

それほど

預かれるなり。さるは、たよりごとに物も

ヤ行下二・未打消・用ア行下二・未使役・用完了・終

絶えず得させたり。今宵、かく＋ある「かかるこ

使役・未

と。」と、声高にももの言はせず。いとは辛く

サ変・未意思・終

見ゆれど、志はせむとす。

イ音便

さて、池めいてくぼまり、カ行四段・命存続・体水つける所あり。

過去・終

ほとりに松もありき。五年、六年のうちに、

係助＜疑問＞

完了・用

過去推量・体

千年や過ぎにけむ、かたへはク活用なく

ラ行四段・用完了・用過去・終

係助＜疑問＞

存続・体

なりなりにけり。今生ひたるぞまじれる。

格助＜主格＞

完了・用

存続・已＜順確＞

感動詞

おほかたのみな荒れにたれば、「あはれ。」

係助へ疑問

ハ行四段・体

打消・体

ク活・用

とぞ、人々言ふ。思ひ出でぬことなく、  
思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女

格助へ主格

打消・已へ順確

副詞へ連体終止法

子の、もろともに帰らねば、いかがは

シク活・体

ラ行四段・用

ラ行四段・終

悲しき。船人も、みな子たかりてののしる。

ラ変・体

格助へ時

シク活・体格助へ対象へハ行下二・未打消・用

かかるうちに、なほ悲しきに堪へず

へ単純接続

存続・体

過去・用過去・体

して、ひそかに心知れる人と言へりける  
歌、

過去・体

打消・体格助へ逆確

格助へ場所

生まれしも帰らぬものをわが宿に

格助へ主格

マ行上一・体へ準体法

小松の あるを見る が悲しさ

係助

完了・体

係助

推量・体

とぞ言へる。なほ飽かずやあらむ、また

副詞係助へ強意

かくなむ。  
結びの省略

マ行上一・体過去・体

格助へ比喻

マ行上一・未反実仮想・未

見し人の松の千年に見ましか

△仮確▽

ば 遠く悲しき別れ せ まし や

サ変・未反実仮想・終係助△反語▽文末用法

ク活・已△逆接▽

副詞

忘れ難く、口惜しきこと多かれど、え尽くさ

打消・終

とにもかくにも

強意・未意志・終

ず。とまれかうまれ、疾く破りてむ。



現代語訳  
(打つのめんどいから写真)

夜がふけて来れば、所々も見えず。京に入り立ちてうれし。家に至りて、  
門カドにカド入るに、月明ツキアカリかければ、いてよくあり。ま見ゆ。聞ききこより。  
またふいに、三つとも住むななくらいに、くしくと潰れ壊れている。家になくして

ともして、いふかひなくそごはれ破れたる家に預けたりつるものば、  
 荒れたるなりけり。中垣えあれ二家のやうなれば望みて預られ  
 るなり。さるはたよりてに物も絶へず得させたり。今宵、うかり  
 こととて、声高にものも言はせす。いとほしく見ゆれど、なほはす。  
 さて、泡めしくほまり、水つける所あり。ほごりに極もありき。五年  
 六十年のうちに、十年や過すに、けむ、かたへはなくなりけり。

今生たるぞまじれる。おほりたのふは元来□たれはあはれとぞ  
人りきふ思ひ出でぬと云く、思ひ恋しきかこうち、この家にて生  
まれしやうも、うも帰らねば、いりかは非しき。胎人も、みなまた  
りてのち。りりうこうちになは非たきに堪へずと云そりにい知れ  
るんと云へ、ける歌／生まれしも帰らぬものをわら宿に小たのめる  
と見ふり井んよてそき入る。なほ飽かふそまらむまたらくなむ。  
またし人の松の十年に見えしうは遠く君しき別れをまじり、土へ蒔く、  
に惜しきにて唄ひれて、え尽く、まゝとまゐりて、みれ、疾く破りて、  
し。

おじい(留守米屋)のいばも、  
 せがれてしまつていたのであるよ。隣の家の垣根はあるけれど、一つの家のよ  
 うであつて、(ほかに)望んで預かん  
 たのである。それでも、ついでのある度に物も絶えず手に入れますでいた  
 今映(従者たち)に「二人なでいて」で  
 あるの。と、大抵で三つよつはこはすまはいててもムでいて思われるけれど、  
 新礼はしよつと四に。

さて、炮台にいらしてくぼんで、水にのびて、うとみがある。その中に  
うに（うなぎ）が泳いでいる。五  
に半のうにが半のうに（うなぎ）が泳いでいる。五  
に半のうにが半のうに（うなぎ）が泳いでいる。五

[illegible]